

Society5.0時代の体育科の授業づくり ～中学年「表現」の実践を通して～

廣町 智栄

はじめに

オリンピックウイヤーとして華々しい年になるはずだった2020年は、最初から最後までどこを切り取っても新型コロナウイルスづくめの年になってしまった。しかし、その誰も経験したことのない非常事態は、ICT環境の整備と活用を一気に進めることとなった。教育現場でも、オリジナルの授業動画を配信したり、双方向通信による授業に取り組んだりした教師も一定数いたであろう。

また、2020年は新学習指導要領の本格実施の年でもあった。「資質・能力」、「見方・考え方」がその中心にあるものの、教育書にはプログラミング教育やGIGAスクール、STEAM、文理融合、SDGsなど数多くの教育ワードが取り上げられていて、施行初年度でありながらも、教育がいかに変革の時を迎えているかが伺える。さて、その中であって体育科の学習とはどうあるべきなのだろうか。

コロナ禍において、運動不足は度々問題視され、マスクミで取り上げられた。SNSには、トップアスリートから芸能人まで、様々な人がエクササイズ動画をあげていて、日本人の健康に対する意識の高さと、体を動かすことの重要性を改めて感じた。「豊かなスポーツライフ」は、先述の指導要領にも示されていて、突き詰めて言えば児童が楽しく運動していれば体育科の目標を達成していると言えるのかもしれない。しかし、それだけであれば年間100時間、音楽や図工の倍ほどの授業時間数が必要だろうか。本稿では、体育科における学びを、中学年の表現領域の実践を基に考え、体育科のあり方の一提案としたい。

単元を計画するにあたって

体育科においても、昨今の研究授業では思考力・判断力・表現力を求めるような学習が見られるようになってきたが、まだまだ運動量の確保や技能の習得重視の傾向はある。技能習得への効率的な指導法の追究は重要だとは思いますが、これからは児童の「できないけど分かった」、「分かったらできた」という論理的思考を促すような授業づくりが必要なのではないかと筆者は考える。

6月の登校再開以来、3年生では感染予防マニュアルに配慮しながら体づくり運動やベース型ゲーム等に取り組んできた。そこで繰り返し問うてきたのは、どうしたらうまくできるか、何がちがうのかということである。これは、低学年で〇〇遊びに取り組んできた児童にとって、かなり難しい発問であったと思うが、例えその考えが正しくなかったとしても、感覚的に分かっていることを言語化してアウトプットすることは、その後の活動に大きな影響を与える。活動の焦点化と視点の共有化をすることによって、児童がそれぞれのレベルで関わり合う協働性が生まれるからである。

以上のことをふまえて、本単元では生物の動きの仕組みを理解しながら、表現に生かしていく学習過程を計画した。表現は、自分の感情を開放することが求められるので、恥ずかしさから、高学年では特に抵抗を感じる領域である。しかし、低学年でのまねっこ遊びや理科の学習とのつながりを持たせることによって、相互的に理解を深められるのではないかと考えた。以降は、この動きから集団の動きへと移る第4時を主として取り上げる。

実践報告「体で表現 生き物の世界～教科横断的学習で深める体の動き～」

○単元計画（並行して動画サイトでの調べ学習）

- 1 学習の進め方を知る。
- 2 いくつかの音に対応する動きを考え、さらに動きの要素を広げる。
- 3 音を組み合わせ、ひと流れの動きを意識して表現する。
- 4 グループで動きを見せ合いながら、共通のテーマで表現運動に取り組む。
- 5 グループで考えた動きの発表会をする。

①心をほぐす準備運動

本単元では、毎時間の導入でスロットゲームを用いた準備運動を行った。方向や強弱、様子を決めるアプリだが、ゲーム性を持たせたことで、児童は自然と体を動かし、時数が進むにつれて、友達と一緒に動いたり、自分だけの動きを見つけたりする姿も見られた。



②生き物の世界を想像して

課題の設定をする際は、前時のふり返りをワークシートから抜粋し紹介した。具体的には、「音によって、動きの大きさや速さを変えたよ。」「ドンドンは、氷が割れる音だと友達が教えてくれた。」「友達と合わせてみたら、うまくできたので、他の人とも合わせてみたい。」等である。そして、音から想像できる場面や、その場面で聞こえる他の音についてイメージを膨らませた。本時で初めて、初めて集団の動きに挑戦するため、ひと流れの動きになるよ

うに意識させたかったが、話し合いでは、音、テーマ、はじめと終わりと決めることが多くなってしまい、話し合いが複雑になっていたようだった。

③タブレットを活用したグループワーク

グループでの活動には、タブレットを活用した。これは、動きの再現を容易にすること、また互いの位置関係を意識させるためのものだった。撮影してばかりになる児童がいないか注視したが、初めのうちは撮っていた子も表現する方に楽しさを感じたようで、据え置きで撮ったり、教師に頼んだりしてきて、主体的に取り組む意欲が見られた。学習の最後には、児童が撮影した動画を視聴し、メリハリのよい動きや、友達と表現することで生まれるストーリー性等について全体共有し、「みんなちがいがあってよかった。」等の意見が聞かれた。



おわりに

第5時の発表後のワークシートには、「次はクワガタのガクガクする感じを出したい。」「股を広げる時の角度に注意してできた。」「一人では小さな動きだけど友達と合わせたら大きい動きになった。」等、それぞれが課題とした生き物への理解を深めたり、表現そのものの楽しさに気づいたりすることができていた。学習の展開には、話し合いの焦点化を始め、まだまだ改善の余地はあるものの、児童の気づきは、体育だけでは表しきれず、理科の学習だけでは感じることはできなかったものであると考える。体育科の教科横断的な可能性については、来年度も模索していきたい。